



育児をめぐる迷惑意識が母親の育児行動に及ぼす影響：行為者側からみた公共の場における社会的迷惑

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-04-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中谷, 奈津子, 森田, 美佐 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006053

育児をめぐる迷惑意識が母親の育児行動に及ぼす影響

— 行為者側からみた公共の場における社会的迷惑 —

中谷 奈津子*・森田 美佐**

1. 問題の所在と目的

本論でいう「育児をめぐる迷惑意識」とは、「こんなところに子どもを連れてくるなんて」「子どもを理由に仕事途中で帰る母親は困る」などといった、子ども、子育て家庭に対して人々が抱きがちな不快感のことをいう。

近年、子どもや育児をめぐる「迷惑」について、社会的な論争が繰り広げられるようになった。2012年、アエラ11月26日号の「子どもの声は騒音か」という記事が発端となり、ツイッターやフェイスブックなどで大きな反響を呼んだ。同じころ、漫画家のさかもと未明氏が、飛行機で泣き止まない赤ちゃんとその母親に激しい怒りを表現したことも話題となった。12月にはNHKの「週刊ニュース深読み」の中で「子どもは社会の迷惑か」というテーマが取り上げられ、公共交通機関での問題や保育園と住民とのトラブルについて議論されている(2012年12月22日放送)。これら論争の背景には、少子化の進行から子どものいる世帯が減少していく中で、育児に対する社会全体の寛容さが失われつつあることを示すと同時に、わが国に根強い母性神話や性別役割分業意識を前提とした「育児は親や家庭が担うもの」という親役割への強い期待感などがあると考えられる。

育児を取り巻く現状は、多くの母親にとって厳しい。イクメンが取りざたされる現代社会においても、子どもから離れる時間を持つことが難しい母親も多く(中谷2008)、子どもを夫に預けることに抵抗感を持つ母親もいる。加えて、母親の子どもを預ける抵抗感は、子どもをかわいく思えないという、子どもへのネガティブな感情につながることも示唆されている(中谷2006)。こうした状況は、核家族化した現代社会では、夫からの協力が得られなければ、家庭内でも母子のみの関わりに陥りがちになること、地域社会に育児への寛容さがなければ、ますます育児は閉じられたものになることを意味している。さらには社会全体の中にある「育児をめぐる迷惑意識」が、育児期にある人々を抑圧し、排除していく可能性も指摘できる。それは同時に、特に母親の「個」としての行動範囲を狭め、母親が常に「人への配慮や迷惑」を考慮に入れ、他者との関係調整を図りながら親役割を担って生きていかなければならないことを意味している。

では実際に現代社会に生きるわれわれは、子どもや育児に対する「迷惑意識」をどのように

* 大阪府立大学人間社会学部

** 高知大学教育学部

抱いているのであろうか。政策的には「子どもは社会の宝」「社会で子どもを育てる」などともいわれながら、一般社会では「子どもを産んだ親の責任」「子どもを迷惑に思う」心性がいたるところで垣間見える。その迷惑意識は、実際に育児を担っているものの中にも内面化されていることが予想されるが、未だ言説の域を出ないのが現状である。子どもを持ちたい人が、子どもを持ってよかった、生まれてきた子どもたちが、この社会に生まれてきてよかったと思えるような社会を構築するために、これまで言説の域を出なかった「育児をめぐる迷惑意識」について、研究課題として高めていくことが緊急の課題となる。

「育児をめぐる迷惑意識」は、吉田のいう「社会的迷惑」（吉田 2009）の一部であると考えられる。吉田らは、社会的迷惑という概念を、「ご迷惑をおかけします」などといった謝罪の常套句である日常用語とは区別し、「行為者本人が意図するかしないかに関わらず、当該行為が本人を取り巻く他者や集団・社会に対して直接的または間接的に影響を及ぼし、多くの人が不快と感じるプロセス」と意味づけている。育児行為においても、例えば大きなベビーカーを混雑した電車に乗せる行為は、行為者である養育者が意図するかどうかに関わらず他者に影響を及ぼし、場合によっては他者を不快にさせることがある。このような状況は、公共交通機関、デパートや商店などでの場面、就労場面等、様々に想定されよう。しかし吉田らが一連の研究の中で用いた迷惑行為の項目には、育児に関するものが非常に少なく、それら研究から育児を取り巻く知見を読み取ることができない（吉田・安藤・元吉他 1999、石田・吉田・藤田他 2000）。また育児には、先に述べたとおり、社会的な親役割期待や規範意識等が複雑に絡み合っているとも考えられ、一般的な社会的迷惑とは区別する必要も考えられる。

このような観点から本研究では第一に、「育児をめぐる迷惑意識」の内実を明らかにすることを目的とする。社会的迷惑には「認知者側」と「行為者側」それぞれからの見方があるが、本論ではまず「行為者側」、つまり子どもの養育者からみた社会的迷惑を考察していくものとする。養育者は何を他者への迷惑行為と考え、その意識はどのような要因によって形成されてきたものなのか、またその意識はどのような事柄に影響を及ぼしていくのかを、インタビュー調査をもとに明らかにする。分析が多岐にわたるため、本論では特に家族関係や職場以外の公共交通機関やデパート、レストラン等の公共の場における社会的迷惑に焦点を当てて検討するものとする。

2. 調査の概要

(1) 調査の方法

2012年2月～3月、大阪府または高知県で、現在乳幼児を育てている養育者を対象に半構造化インタビューを行った。都市部のみ、地方部のみの調査では、育児をめぐる意識や価値観に大きな偏りが予想されるため、都市部と地方部の2地域で調査を行うこととし、大阪府内の私立認可保育所、高知県男女共同参画センターからの調査協力を得た。調査対象者は大阪3名、高知2名の計5名で、いずれも1対1でインタビューを行い、それぞれ40分～1時間半程度の時間を要した。尚、本調査は大阪府立大学研究倫理委員会の審査を受け、倫理的配慮に留意し

て行った。

調査項目は、①基本属性、②育児に関して他者に迷惑をかけないように配慮していること、③育児をしていて他者に不快に思われたこと、④他者の育児を見て不快に思うこと、⑤育児をめぐる迷惑意識と関連すると考える要因、の5項目である。

(2) 分析方法

ICレコーダーに録音した内容をすべて起こし、逐語録を作成した。それらを意味のまとまりごとに分割し通し番号を付した。抽出された文書セグメントの総数は367であった。それらのうち同居の家族関係や職場以外の公共の場における社会的迷惑に関連すると思われる文書セグメントを分析対象とした。ただし住居スペースで起こったことでも、家族以外の関係性に基づく内容は分析の対象に含んでいる。

抽出された文書セグメントは、意味内容の類似性に基づいて分類を行い、それぞれ表札を付帯した。その際、すべての表札と文書セグメントの記述を総覧し、表札と記述の整合性を確認した。次に、すべての表札を意味内容の類似性に着目してさらに分類を行った。これら一連の分類作業は、5段階にわたって繰り返され、最終的に8つの大項目に集約された。その後、表札間の関係性を探り図解化を行った。

3. 結果

(1) 調査対象者の属性

調査対象者の年齢、職業、子どもの数等を表1に示す。対象者は、20歳代から40歳代の有配偶女性となった(表1)。以下、文中の()内に記されたアルファベットは、対象者のIDを示している。

表1 調査対象者の属性

ID	地域	性別	年齢	配偶者	子ども数	長子	末子	職業
A	大阪	女	30歳代	有配偶	2人	3歳	0歳	医師
B	大阪	女	20歳代	有配偶	2人	3歳	1歳	パート
C	大阪	女	30歳代	有配偶	2人	5歳	1歳	会社員
D	高知	女	40歳代	有配偶	2人	5歳	3歳	公務員
E	高知	女	30歳代	有配偶	1人	0歳	…	公務員

(2) 子育てに関する迷惑につながりやすい内容(表2、図1)

ほとんどの対象者が、子育てに関する迷惑を他者にかけての経験を持っており、迷惑につながりやすい内容や行動が語られた。「迷惑をかけた経験がない」と答えた対象者からは、その後、外出を極力控えているといった内容が語られた。

育児の迷惑となりやすい内容としては、ベビーカーなどで大きく場所をとること、子どもが発する声や音、子ども特有の行動、不適切な行動に集約された。子ども特有の行動としては、動き回る、突然行動する、興味のあるものに触れる、汚れる、といった内容が、不適切な行動には、店内で他人に暴力をふるうといった他人への危害、エスカレーターの逆走などの危険行為、見知らぬ大人からの注意に耳を傾けないなどの他人に失礼な態度が集約されている。

迷惑をかけやすい場所には、レストラン、スーパーやショッピングセンターなどの店内、公共交通機関、住まい、歩行時、子どもの遊び場、病院などがあげられた。

お買いものしている時に、狭いパン屋さんではあったんですけど、ベビーカーを押してレジに並んでいたんですけどね、ちょっとベビーカーで通れなかったんですね。多分、で、ちょっと年配の方だったんですけど、すごい怒鳴られて…。「邪魔なんや、どけろ！」って言われて…。(A)

買い物の時なんですけど、…ベビーカーを使うのに絶対エレベーターが必要になってくるんです。土日ってすごい何回待ってもいっぱいという時があるので、こっちも申し訳ないけど無理矢理に乗ったりとかする時に、やっぱり普通に乗ってらっしゃる方はちょっと不快な顔をされたりはしますね。…もう顔がね。「すいません、すいません」って（言いながらエレベーターに乗りました）(C)。

（マンションの下の階の人から静かにしてと）言われましたね。まあ、小さい子がいるというのを知らなかったのかどうかはわからないんですけど、でも、足音聞いたらだいたい小さい子がいるぐらいわかると思うんで、注意はされましたね。一度会ったときに、「ちょっとうるさい」とか、言われましたね (B)。

(3) 親へのまなざしの厳しさ

周囲からの親へのまなざしの厳しさを意識する対象者もみられた。ここでは、生まれたばかりの赤ん坊を連れての外出、夜遅くの子連れの外出について「大丈夫なのか?」「どうしても外出の必要があるのか?」など、批判的な声に遭遇したり、対象者自身が批判的に見てしまう内容が集約された。

そういう大きいお店とかにあんまり（子ども）2人だけで行くのはちょっとっていうのは、なんか妊娠していたかもしれないくらいで行った時に、赤ちゃんを連れてる人がいて、〇〇（大型ショッピングモール）とかいろいろ行った時に、周りの人が「赤ちゃん連れて大丈夫?」みたいなことを…。(略) そういうのを聞いていて、あんなふうに言われるんだったら嫌やなと思う。あんまり行きづらいなと思う。すごい小っちゃい赤ちゃんを（他の人が）確かに連れちゃったがですけど。(E)

また、そもそも子どもが不適切な行動をとっても、子どもを叱らない、注意しないなど、調査対象者自身が他の親の養育を疑問視する内容もみられた。ショッピングセンターの遊び場などに子どもだけ残して、親は買い物に行ってしまうといった、親が子どもの傍にいないことも、批判の対象として挙げられた。

買い物に行って、お母さんはもう1人の小さい子を自分で乗せて買い物のカートで、「あんたらそこでしな!!」とかは言うてるけども、口だけで、いざもう、こう、いったらあかんっていうんじゃないくて、もう、ダーッと行ってしまふ感じですかね。(略) 人が出てきたらぶつかるやろし、「何にも言えへんのか、お父さん、お母さん」みたいな。お母さん何にも言えへんのかなと思ったら、「やめときや!」ぐらいで、あんまり監視してないというのか。どうせ言うても聞けへんし、みたいな感じなんでしょうね。(略) それはあかんやろうっていうようなことを叱らないお母さん達もたくさんいてはりますからね (B)。

（子どもを）放っという（いってしまう人もいる）。「いやいや、子ども1人で喚いてるよ」みたいな。ほんなら店員さんが来たりしますやん。ほんならもう恥ずかしいからって手を引っ張っていつてるお母さんがいるし、ちょっと恥ずかしいじゃないけど、みんなの注目になってるよって思ったりする。どうしようもないのは分かるけど。そういうのにみんなが集まってきたりするじゃないですか。(A)

(4) 周囲の批判を回避したい気持ち

周囲からの批判を回避したい親側の気持ちも浮かび上がった。そこでは自分の育児のせいで他人を不快に思わせることが少なくなるようにしたい、人前で厳しく子どもに叱ることで、自分はちゃんと育児しているとアピールしたい、などという気持ちが集約された。それらの気持ちと同時に、親である自分が責められるのではないかという不安も語られている。

(なんか責任みたいなのが) そうですね。あるんです。はい。いろんな目線ってあると思います。「こんなとこで遊ばせて」とか、「こんな人いっぱいなどこでゴロゴロさせて」っていう人もいれば、「仕方ないやん、子どもがいるのに」っていう。どっちを取ろうと思った時に、やっぱり不快に思われる人を少しでも少なくしたいので、不快に思うであろう人の立場に立ってやらないとっていうのがありますね (C)。

まだ首がすわってないくらいの赤ちゃんを連れちゃったきい、からかもしれんけどなんか「あんな小さい子を連れて」みたいなことを、そこだけじゃなくていろんなとこでそういうのを、なんか聞いたりしてて、そんなふうに、言ったら親の都合であんな小さい子を連れて、病気になるかもしれないのに、みたいな感じで言われたくないみたいなものがあるかもしれない。(E)

(5) 内在化した「親責任」

対象者たちに内在化された「親責任」も浮かび上がった。「自分の子ども」に対する責任は特別なものであり、それは他人の子どもに対するものとは全く別のものであると語られている。たとえ同じ行為を他人の子どもが行っても気にも留めないが、それが自分の子どもである時、厳しく叱る、注意する、というものである。

私も怒りません。よその子は。自分の子じゃないですのに(怒ったりはしない)。(略)(知らない子は)怪我しようが何しようが私には関係ないんで、という感じですね。(略)それでもこちらが怒って、「そんなことで怒らんといってください」って言われてもこっちも気分悪いし、それやったらさわからない (B)。

(自分の子どもが他の子を噛んだとして) 先生が言わんでも、…家に帰って(子どもが)お母さんに「誰々ちゃんにやられてん」って言うじゃないですか。ほんなら分かるじゃないですか。それで私が知らんまま、噛んだ方の親が知らんままに…おったら何か思われたら、やっぱりちょっと…「噛んだのに何のひと言もない」みたいなことを思われるかなと思う。自分は別によくても自分の子どもが噛まれたりとかしてても「噛んだやろ」というのは思わないんだけど、思う人もおるだろうなと思って、それから思われたら嫌やなって。…何て言うんですか…無神経みたいな… (D)

(子どもに優しい人は) 自分の子どもじゃないからだと思います。って私は思うんです。私も人の子がやっても何も思わないです。子どもやから仕方ないねって。でも自分の子どもになると違うんです。なんか伝えられないですけど… (C)。

また、子どもの評価を自分の評価ととらえる見方も集約された。

今考えたら別に私に「ちゃんとするように」っていうふうに直接もちろん言われたわけじゃないのに、「なんか私が悪かったなあ」って、ちょっと暗くなったりとか、思う部分というのは感じたことがありますね。…その人に対して腹が立つとか私はないんですけど。…腹が立つっていうより「あっみんなの前で言われた」っていう方が(強い)。(略)…それを言われたらもう自分の子どもがしゅう(している)ことがいかんみたいなことを暗に言われただけでも「あっ!言われた」みたいな。(略)…そういう感じで閉鎖的というか…自分の子どもの責任は自分がつて…自分が否定されたような、子どもが注意されたら自分が否定されたという感じになる気分かもしれません。(D)

(6) 迷惑回避のための行動

親たちは子育ての親責任を内在化しつつ、周囲からの親批判を回避したい気持ちを働かせ、実際に、行動を制限する、場所を選択する、主張しない、子どもを静かにさせるなどといった、いくつかの迷惑回避のための行動をとっていることも浮き彫りになった。

行動の制限は、子どもの行動と親子の行動の制限に集約され、子どもの行動の制限には、子どもをじっとさせる、興味あるものを触らせない、ジャンプさせない、おもちゃの音は出させない、友達と遊ばせない、公共交通機関で座らせない、道を歩くときは親から離れない、などが集約された。親子の行動の制限には、外出しない、公共交通機関にのらない、早く退散する、といった内容が抽出された。

家、マンションなんですけど、ちょっと上の階の方なので、やっぱり子どもは暴れたりするんですよ。でもそういうのを気にされる方は結構いてるみたいなので、できるだけ…(略) 静かにするように子どもにも言い聞かせてますけどね。かわいそうやなと思うんですよ、すごい。お家でね、「静かにしなさい」っていうのも。でも時間帯、夜とか何時以降はもう大きい音は出さない、おもちゃの電源入れないとか、そういうのは守ってくれてますけどね、がんばって。(A)

(レストランなどでは) 何にも言わなくてもずっと見てはる方とかいらっしやるので、そういうのを自分たちも気にしてご飯食べられないのも嫌なので、ゆっくり食べたい…まあゆっくりは食べれないですけど、できるだけ人目にあんまり迷惑にならないような感じで個室とか座敷みたいな所を取りますね。他はもう交通機関…電車とかバスにはもう乗らないようにしています。(A)

お買い物とか行った時に、商品とかいっぱいあるので、触らせないように、もう寸前でガーッガーッと取ったりとかして、必要な物だけ買って帰るっていう。大人が2人いれば余裕を持ってお買い物できるんですけど、自分1人で子ども2人連れて行くとなると、なかなか自分の時間というのはまずないので、本当にいる物だけを買ってパッパッと帰るようにしています。(C)

自分もすごい神経質で、たぶん子どもを管理したいみたいな、たぶん管理したら安心じゃないですか。で、「行かれへん」ってすごい言ったり、「そこ出られへん」とか、言うたらまあ安心やし自分も言われることもないし。そういうところで管理しちゃうのかもしれないけど、さらにそれの上をいくような人の話もありますよ。例えば友だちを…保育園の時から友だちを選んだり。「あの子とはもう遊びな」(遊んではいけない) っていう。でもその友だちの子は遊びたいみたいなんですけど、(略)…。「遊びな」とかいう話を本人にも言うし、さらに親にも言って、相手の。「遊ばさんとしてください」って。(D)

また、たとえその場所が子育てに対して優先される場所であっても、それを主張しない、こちらが悪くなくてもすぐに謝る、といったことが、迷惑回避の行動としてあげられた。

自分も嫌な気持ちになるのが嫌なので、どっちかといったら文句を自分も言わないようにするし、(略)…。自分がイラッとすると周りも嫌な気分になるし、もう自分がいちばん嫌な気分になるというのがすごい最近分かってきて…。…(略) だから、自分ができること、外の公共機関とかでも、別に汚れてたら前の人が去った後に、「いやだ…」って思いますけど、別に文句言わずに、まあ拭けばいいやん。自分で拭けばいいやんって思っ…。(A)

(ベビーカー専用のエレベーターについて) 施設自体はすごくそういうふうに配慮してくれて、ここのエレベーターはベビーカー・車いすの方優先でお願いしますっていう区切りは書いてあるんですね。やっぱり提供する側と利用する側の思いが違うので、エレベーターはベビーカーとか車いす優先ってなっても、やっぱり乗れないという

ことはあるんです。でもやっぱり「エレベーター、優先じゃないんですか？」って言えないところもあるので。5才と1才の子がいるんですけども、大人の汚い部分を見せたくないなどというのがあるんです。そういうのって見せると、子どももすごい不安な顔するし、…(略)。そこで言い合いして乗ったところで、すごい自分も気分悪くなるので…。(C)

(7) 社会的な意識

こうした育児をめぐる迷惑意識の前提として、社会全体の意識も抽出された。そこには「育児は育てている親自身の問題」と考える私物的わが子観の根強さ、周囲や上の世代からの親責任への期待の高さが含まれている。

いや、私はないけど、でも言う人いますよ。「自分はこんな厳しい状況でもこうしてきたのに、どうしてあんたはそれぐらいでできないの？」っていうふうに思う人もいますね。自分が経験してきて、「こうやって頑張ってきた、すごい努力したから。もっと努力しなさいよ」って思う人もおるかもしれませんね。(D)

(9) 社会背景

育児をめぐる迷惑意識の土壌として、社会全体の弱者への配慮のなさ、人付き合いの少なさ、子どもの預け先などの育児環境整備の必要性といった社会背景が抽出された。

優先座席とかに普通に座っている女の人もそうですけど、サラリーマンの人とか、高校生とか中学生も結構優先座席に座って。そこに盲学校かな、あるんですけど、全然関係ないですけど、そういう人が乗ってきてもこの路線は誰も譲らないんですよ。杖をついてる人が来ても、障害がある人が来ても、お年寄りが来てもなんか譲らない。あんまり譲ってるとこを見たことがないです。(略)…インターネットとかで(妊婦の)マークを付けているのが腹が立つみたいなの、そんな人もおるみたいで、なんかこれ見よがしみたいなの感じで(席を)「譲れ」みたいなの感じに見える。なんかね、妊婦は病気じゃないから、みたいなの。(E)

そんなめっちゃめっちゃ(友だちと)交流があるわけじゃないんですけど…。そうですね…。情報交換…。まあ…うん、あんまり預けたり、そんなもないですね、私は。(略)(ママ友に)あまりそんな預けてどこか行くとかないですし…。(A)

両親ふたりでちょっと出かけたからって行って預かる分には、うちの、私の両親は、あまりいい顔はしません。(夫婦で)出かけたという分には、よっぽどのことがないと(親は預かってはくれない)…。(B)

(10) 育児をめぐる迷惑意識と関連する個人的要因

これら迷惑意識を軽減させる個人的要因として、人生経験の蓄積、多様な考え方の認知、相手の立場に立って物事をとらえる共感性、生活や心の余裕、自分の子どもや親戚の子どもなどの育児にかかわる経験が抽出された。

(お年を召した)あの人たちも、自分も子育てしてきて孫もいてで、「こんな小さい子にそんなことで怒ったったらかわいそうや」って。「みててみ、どうなろうがこんな大人になってあなたのようになっていくよ」と。やっぱり、長い目で先をちゃんと見据えてはる人っていうのは、ちゃんとわかってはるんやなあと。私達みたいなの、こじか見えてない、ここまでしか知らないっていうと、すごいそんなことで怒って。(B)

基本的にやっぱり嫌なことをされた人は、私からしたら同じようなことはしないようにしようと思う。自分が嫌な目にあったらお互い子どもを持つ同士としたら、それはやめとこうと思いますよね。(A)

私が子どもやったらどう思うかなとか、いったん代えるんです。代えるようにして、視線を下げてみるんです。すると、あんまりきつく言うことでもなかったなとか思ったりしますね。(C)

(迷惑意識を左右するのは) やっぱり、自分の気分にもありますし、自分の機嫌が良い、自分にすごく余裕がある、今日は何されても怒らんでもいけるなっていう日ももちろんあれば、仕事疲れて帰ってきて、仕事でうまいこといけへんくて、もう自分もイライラしてるときに、お茶コップひとつこぼされただけでもすごく怒ってしまったり、するときもあるんで、私はきつと心のゆとりとか余裕だと思うんです。(B)

夫の妹さんがそれこそこの子が生まれるまでは飛行機とかに赤ちゃんが乗ってたらキーンとなって泣くじゃないですか。あんなんを見たら本当に腹が立ってたけど、この子が生まれてから、全然赤ちゃんかわいって思うようになったって言って。赤ちゃん、子どもを身近なものとして思ってるかどうかかな。(E)

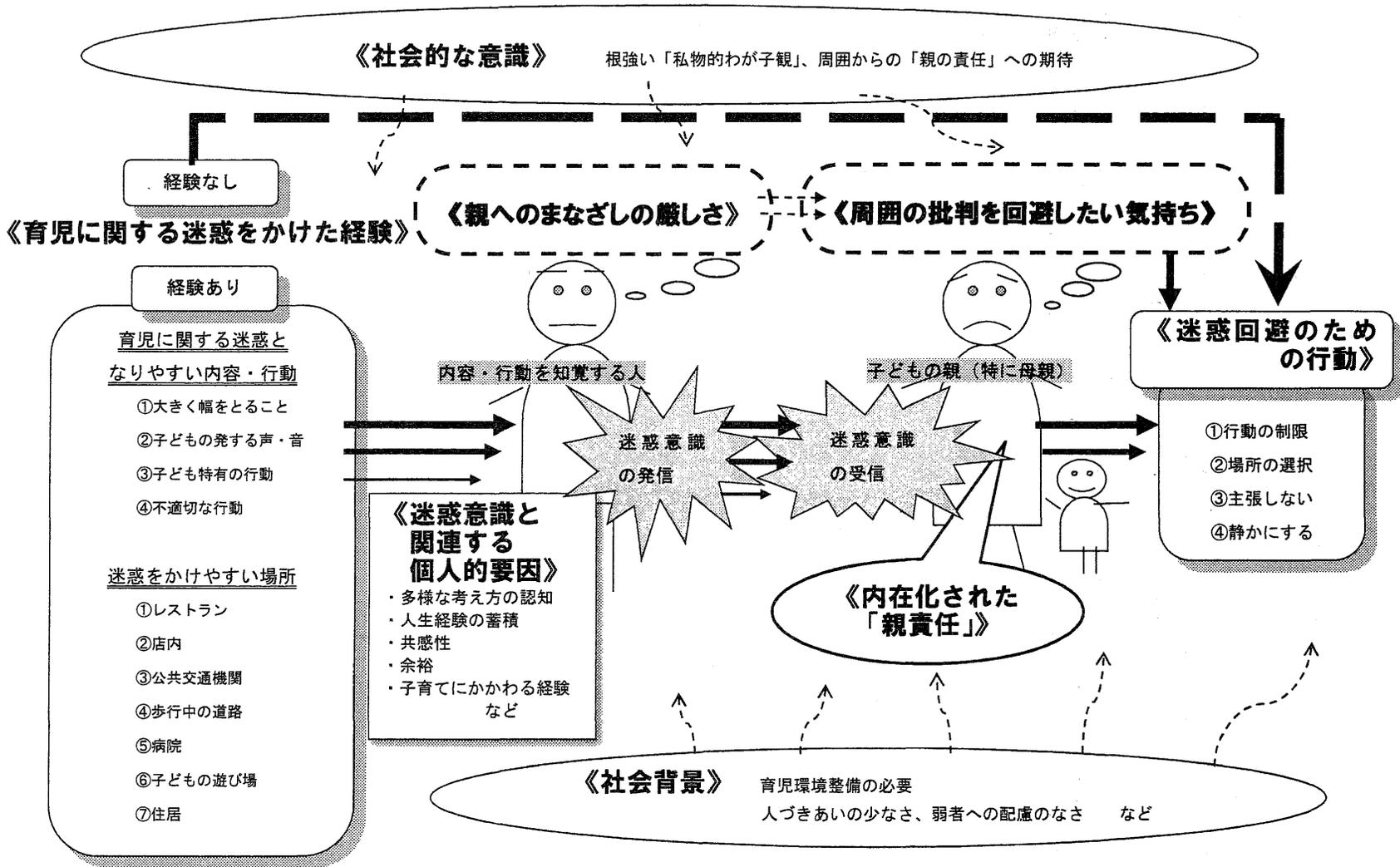


図1 育児をめぐる迷惑意識が母親の行動に影響を及ぼすプロセス

4. 考察

抽出された育児をめぐる迷惑意識に関する項目について、表札間の関係性を探り図解化を行った結果、図1のように示された。

(1) 地域の子育て機能の脆弱さが生む迷惑意識

迷惑をかけた経験の有無については、「経験なし」という対象者が1名、その他の対象者4名で「経験あり」という回答であった。今回の調査では、迷惑をかけた経験について「なし」と回答されたからといって、対象者を取り巻く周囲の人々の理解や協力があることを意味しているわけではなかった。対象者はそもそも外出をしないようにするなど、自分たちの行動を制限しており、公共の場での育児行為を控えようとする心性がうかがわれた。船橋は、育児中の世帯の減少によって地域は子育ての場として機能しにくくなると示唆しているが(船橋 1998)、この結果はそれを具体的に表す象徴的なものであるといえる。

迷惑をかけやすい内容としては、大きく幅をとる、子どもの発する声・音、子ども特有の行動、不適切な行動があげられた。迷惑をかけやすい場所は、レストラン、店内、公共交通機関、歩行中の道路、子どもの遊び場等であった。中谷らは、保育所や幼稚園以外の親子の居場所として、スーパーやデパートなどの商業施設が上位に上がること明らかにしているが(中谷・森田 2013)、子どもを連れて大きな荷物を持ちベビーカーを押して街を移動することは、もはや育児の日常風景といえる。育児中なら当然ともされる行動や内容が、迷惑をかけやすいこととして浮かび上がる現状自体が、地域における子育て機能の脆弱さを意味していると思われる。

住居内や子どもの遊び場においても、他者への迷惑を配慮する必要があることも浮かび上がった。少しの間子どもから目を離したり、のびのびさせたりしたい場においても、親には常に子どもの一挙一動を見ておくことが求められていた。養育者側からすれば、子どもから目を離すことが許されないこと、子どもからすれば、常に養育者に監視されているような状況にあることも推察される。子育て支援を目的とした地域のひろばにおいても、親が子どもを見ていないことを指摘されることがあるという(奥山・大豆生田 2003)。今回の調査結果は、そうした育児の厳しい現状を再確認しているともいえる。

(2) 育児の当事者、当事者以外からの「厳しいまなざし」

また育児の行動や内容を「迷惑である」と知覚し発信する側には、親へのまなざしの厳しさがあると考えられた。それは現在育児に関わっていない人のみならず、育児中の養育者たちも同様であった。育児の現状理解の難しさゆえ、育児を行っていない人が公共の場にいる親子に厳しいまなざしを向けるだけでなく、育児の当事者である養育者自身も自らの価値基準で他者の育児に厳しいまなざしを向けているといえる。

さらに、そうした親へのまなざしの厳しさは、周囲の人が抱くであろう「迷惑意識」を回避したいという養育者側の気持ちに影響を及ぼしていることもうかがえた。多方面からの親責任への圧力を背景として、「社会全体の子ども」としてとらえる人々の心性は乏しいこと、「自分の子ども」に対する責任は特別なものと認識し「自分の子ども」だけに注意を払ってしまう養育者側の現状もうかがえた。子どもの評価を自分の評価と考え子どもと養育者が同一視されて

いくことから、たとえ子どもの問題であっても、「親である自分が責められる」という思いを養育者が抱きやすくなっていること、「自分はちゃんと育児をしていることをアピール」しようという自己防衛の心性があらわれやすい状況が読み取れる。

(3) 迷惑回避のための行動と強まる子どもへの指示・干渉

こうした養育者の心性は、実際に迷惑回避のための行動につながっているものと思われる。具体的には、子どもや養育者の行動を制限する、子連れでもよい場所を選択する、子連れ優先を主張しない、子どもを静かにさせるなどである。公共の場でのマナーを伝えていくという狭義の観点からすれば、こうした現状は確かに親の責任を果たす行為であり、子どもの成長においても意味のあるプロセスと捉えられるかもしれない。しかし、人づきあいや弱者への配慮の少なさ、根強い「私物わが子観」や「親責任」への強い期待といった社会的背景等を鑑みると、その考え方は短絡的なものであるといわざるを得ない。育児が親の行動範囲を狭め、「ごめんなさい」「すみません」「ありがとうございます」といった他者への配慮や感謝の意を、常に示さなければならないものであるとしたら、親である喜びは半減し、育児の心理的な負担感は増大するものと思われる。さらに言えば、社会全体が育児中の親子・家庭を孤立させ、児童虐待など育児困難の温床となりやすい構造にあるともいえるのではないだろうか。子育ての仕方や心構えといった狭義の親教育だけでなく、たとえ育児中であっても自己の可能性や能力を拓いていけるような仕組み、それらを側面から支えていく仕組みを社会全体で構築する必要があると思われる。

子どもの育つ環境からすれば、少子時代に入り、親や祖父母といった大人の目が子どもに多く注がれるようになった。一方で「あれはだめ」「これはだめ」といった養育者の子どもへの干渉も増加したという。藤森は、親の過干渉が子どもの主体性の育ちを妨げ、結果的に自己肯定感の持てない依存性の高い子どもを育ててしまうことを危惧している（藤森 2004）。大人の指示・干渉に縛られない主体としての子どもの意欲を尊重しそれを育てていく場、保育所や幼稚園など利用に条件のある保育施設だけでなく、広く地域に開かれた見守り型の場の拡充を考えていく必要があると思われる。子どもが大人の顔色を見ずに自分で行動できる機会を保障することは、次世代を担う子どもの主体性の育ちにとって極めて重要であると思われる。

(4) 迷惑意識を軽減させるもの

一方で、そうした育児に関する迷惑意識を軽減させる要因も抽出された。例えば、人々が多様な考え方を知り人生経験を蓄積していくことで、様々な生き方や価値観が許容されるようになり、育児中のちょっとした出来事も「こんなこともある」と冷静にとらえるようになるのではないかと思われた。また相手の立場に立って物事を考えていく共感性があれば、大変な育児の状況をわが身に置き換えて、その大変さを推察しサポートしようという気持ちにつながるとも考えられる。さらに自分の子どもの育児や親戚の子どもに関わる経験をすることで、今まで「遠いこと」「自分とは関係のない世界」だった育児が、非常に身近なものとなり、他者へのまなざしをやさしいものへと転換させていくことも考えられる。そして迷惑意識を軽減させるプロセスは、そもそもあらゆる人々の生活や心に余裕がなければ難しいことではないかと思われ

た。雇用状況の厳しさや家庭間の経済格差、子どもの貧困なども指摘される昨今であるが、育児をめぐる迷惑意識を考える際、そうした社会全体の動向にも目を向け、子育て家庭だけでなく多様な人々の尊厳ある暮らしについても考慮する必要があるだろう。

5. まとめと今後の課題

養育者からみた「育児をめぐる迷惑意識」の内実を明らかにすることを目的として、インタビュー調査を行った。公共の場における社会的迷惑に焦点を当てて検討を行った結果、迷惑につながりやすい内容や行動、場所が抽出された。迷惑意識の発信側には親へのまなごしの厳しさが、受信側には親責任の内在化と周囲からの批判を回避しようとする気持ちがみられ、養育者たちは迷惑を回避するために行動を制限するようになっていることがわかった。育児中の親は行動を制限し、自己を主張しないように生活している様子もうかがえた。

少子化に伴い子育て世帯は少数派となり、子育て家庭と子どものいない家庭の境界線が明確になりつつある。しかし現代社会は、ものや人の移動が避けられない社会でもあり、現実には子育て家庭が街に繰り出すようにもなっている。そこでの衝突や価値観のせめぎ合いがマスコミで「育児／子どもの迷惑」として取り上げられているともいえるだろう。同じ空間を生きながら、互いに「迷惑」を感じ合う社会は生きづらいものである。社会全体が、育児に限らない「弱さ」を認め合い、「弱さ」を持つ人々を思いやり、「お互い様」と許容し合えるように、あらゆる機会を通してさまざまな背景を持つ人々が、言葉を交わし、つながりあえることを意図的に仕組んでいく必要がある。そのプロセスの中に「社会全体で子どもを育てる」営みが組み込まれていくことで、子どもを持ってよかった、この社会に生まれてきてよかったと実感できる社会の構築が果たされていくのではないかと思われる。

今回の調査では、対象者を「養育者」とし、性別にこだわらずに依頼したものの、結局母親のみのインタビューとなった。父親からみた育児をめぐる迷惑意識は異なることも予想される。また育児をしていない人から見た迷惑の構造についての具体的検討も今後の課題として残る。さらに育児をめぐる迷惑意識の高低が育児不安や出生意欲と関連することも予想される。今後はそれらの観点を盛り込んだ量的データの収集・分析から実証的に検討していくことも求められよう。

【引用文献】

朝日新聞出版(2012)「子どもの声は騒音か」AERA2012年11月26日号

石田靖彦・吉田俊和・藤田達雄他(2000)「社会的迷惑に関する研究(2)」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要、心理発達科学 47,p25-33

NHK(2012)「子どもは社会の“迷惑”か」NHK 週刊ニュース深読み、2012.12.22 放送

奥山千鶴子・大豆生田啓友(2003)『おやこの広場びーのびーの』ミネルヴァ書房、p88-92

中谷奈津子(2006)「夫婦の結婚満足度と母親の育児不安」『家族関係学』(25)、p21-33

中谷奈津子(2008)「子どもから離れる時間と母親の育児不安」大和礼子・斧出節子他編『男の

育児・女の育児』昭和堂、p45-67

中谷奈津子・森田美佐(2013)「平成 23 年度科学研究費補助金(基盤研究(C))：育児をめぐる迷惑意識が母親の育児不安・出生意欲に及ぼす影響に関する研究」におけるアンケート調査 2013 年 2 月実施 (未発表)

藤森平司 (2004)「少子社会の中での保育 21 世紀型保育のススメ」世界文化社、p13-28

船橋恵子 (1998)「変貌する家族と子育て」佐伯胖・黒崎勲他編『ゆらぐ家族と地域』、p28-49

吉田俊和(2009)「はじめに」吉田俊和編『社会的迷惑の心理学』ナカニシヤ出版、p i

吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛他(1999)「社会的迷惑に関する研究(1)」名古屋大學教育學部紀要. 心理学 46, p53-73

【付記】本論は、IFHE2012World Congress (18.July2012 : Melbourne) において口頭発表したものを加筆修正したものである。本研究は JSPS 科研費 22610022 の助成を受けたものである。調査にご協力くださった方々に感謝申し上げます。

The Influence of Consciousness of Causing Annoyance in Regard to their Childrearing on Mothers Childrearing Behaviors

In this study, it is defined as Consciousness of causing annoyance in regard to their childrearing that people feel an annoyance about someone's parenting in the society and parents feel guilty for others about their own childrearing. The purposes of this study were to grasp whether parents who are childrearing have the consciousness of causing annoyances in regard to their childrearing, if so, when they did it, and what factors were related to the consciousness. Additionally, we also considered the relations between their consciousness and their behaviors of childrearing.

We conducted interviews with the parents in the childrearing. Because of space limitations, at this time, we reported only the results from the parents about their feelings in regard to their childrearing in public.

As the results of the analysis, the things which lead to annoyance in regard to childrearing were taking a lot of space, voice of children and noise, child-specific actions and unacceptable actions. The places where they believe to have caused annoyance were restaurants, shops, public transportations, streets, play spaces, hospitals and apartments.

People who perceived and expressed their annoyance seemed to have had critical look toward parents. Parents who usually noticed others annoyance seemed to have internalized parental responsibility strongly and have attempted to avoid causing annoyance in public by controlled actions. They limited their own actions by choosing a location, not asserting their own rights, avoid going out or taking public transportations, going home early and apologizing even though they are not wrong. They also limited their children's actions by making them quiet and walk by their parents on the street, not allowing them to touch anything, to play with their friends.

The individual factors which might reduce to consciousness of the annoyance were mainly awareness of diverse views, life experiences, abilities to empathize, mental stability and having enough time experiences of parenting.